



大らかさと厳しさ

校長 富田 操

先日、学校に向かって倒れかけていた樹木を、田谷町内会の皆様が伐採してくださいました。一本の木がもう一本の木を支えてかろうじて立っていたような木でした。一緒に、正門周りの枝も払っていただき、正門がすっきりと明るい感じになりました。

短い時間で、手際よく進んでいく作業を見て、地域の皆様の底力を見せていただいた感がありました。そして、学校は、いざというときに助けて下さるこのような方々に支えられているのだと今更ながら実感しました。昨年度に続き、世はコロナ禍で、なかなか地域の方々と触れ合う機会がなく失礼していますが、学校と地域の方との心のつながりは、さらに大切にしていかなければとあらためて思った次第です。ありがとうございました。

さて、学校も今年度は4月から休業することなく順調(?)に進み3か月が経ちました。

運動会では、子どもたちの「全力」で輝く姿を応援していただきまして、真にありがとうございました。その運動会の閉会式で、「コップが空っぽにならないと、たくさんの水が注げないのと同じように、人も空っぽになるまで、全力を出し切らないと、新しい力が湧いてきません。」というような話をしました。

「空っぽと全力」・・・この話と同じように、大切なことというのは、だいたいセットになっているものだなあと私は思います。例えば緊張とリラックス。緊張しているだけでは、力を存分に出せませんが、リラックスしすぎても力が出せません。例えば、甘味と辛味。甘いだけでは美味しくならないし、辛いだけでも一味足りません。正反対のことは、大抵両方とも大切で、対になって意味をもち、そしてそのバランスがとても大事なのだと思います。

そのようなことで私が学校で日頃から感じていることに「大らかさと厳しさ」のセットがあります。

学校は子どもを育てるところですから「まあ、しょうがないね。」とか「まあ、いいか。」という大らかさはどうしても必要なものだと思います。学校は本来そうした「大らかさ」がベースに営まれるべき場所だと思います。そうしないと、子どもの経験として必要な多少の失敗や過ちを受け入れることができなくなるからです。しかし、それと同時に「それはだめだ。」とか「もっとがんばれ」等の厳しさも同じように必要です。

どうしても見過ごしてはいけないことを、厳しさをもって指導すること、その子の可能性を信じ、まあいいかで終わらずにこだわってやりきることを指導することは、学校のもつ、これも本来的な大きな役割です。

子どもの育ちには、どちらもセットで必要です。そしてやはりこれもバランスが大事で、どちらかに偏りすぎてはいけません。子どもを必要以上に追い詰めない「大らかさ」と、子どもを適切に導く「厳しさ」と。

そして、私たちは、それが必要十分である学校にならなければと心から思います。ただ、それを「正しく」見極めて、常に適切に指導することは簡単なことではありませんし、まだまだ不十分だと痛感しています。ですが、それができることを目指すこと、まさに「全力を出す」ことは全教職員にできることです。そこに向かって教職員一同努力せねばと日々感じています。

それを実現するために、保護者の皆様・地域の皆様から、指導と支えをいただいで、学校と共に子どもの成長を見守っていただければ、これ以上心強いことはありません。

今月も、ご支援のほどよろしくお願いいたします。